

# NEWSLETTER

THE JAPANESE SOCIETY FOR  
PARAPSYCHOLOGY

JULY 1978

No. 6

**日本超心理学会第11回大会・第9回研修会の開催について**、既に大会準備委員会から連絡がございましたように、去り8月5日(土)6日(日)に大会を、引続き7(月)8(火)の両日研修会を開催致します。多数の方々の参加を期待致します。超心理学に關心をお持ちの方をお誘い下さい。

## 東京・台北 ESP 遠距離実験の結果 (中間報告)

去り5月12日より21日の間行はれた本実験の採集が、6月18日会員有志により行はれました。これに基づき現在分析が行はれております。最終的報告は、後刻正式に発表を予定ですが、中華民国超心理学研究会より採集結果を送り来て頂きましたので、中間報告として、両国の結果の概要をお知らせ致します。

	被験者数	Runs	Hits	Dev.	Av.
中国	8	160	805	+5	5.031
日本	A 13	260	1282	-18	4.930
	B 20	264	1323	+7	5.011
	C 83	294	1391	+1	5.003

A: 全期間参加者, B: 一部参加者, C: 学生

表に見えように総得点は MCE より有意な偏倚を示していません。但し、学生グループの実験に於ては、call をする時、relaxation と concentration の二つの態度を区別して実験を行った。その結果、各実験日の1 run において(学生は各人2日づつ、実験に参加して)両条件の間に有意な差異が見出された。即ち、ESP 得点は relaxation の条件において positive、concentration の条件に negative である。

	1st Run	
	Relaxation	Concentration
Runs	66	71
Hits	349	310
Dev.	+17	-45
Av.	5.26	4.37

\* CR: 2.67

## 学会ニュース

第125回月例研究会 1978年6月24日(土)  
1400~1900 借行社で開催、出席者6名。

1) Handbook of Parapsychology の翻訳分担計画の立案、2) 第11回大会計画詳細打合せ、3) 研究報告「圧覚を用いた ESP 実験」松田氏、4) 文献紹介 R. Stanford: Conceptual Frameworks of Contemporary Psi Research 金沢氏、5) 東京・台北 ESP 遠距離実験の整理要領の決定、加行はれぬ。

第126回月例研究会 1978年7月22日(土)  
1400~1730 日本体育大学で開催、出席者9名

1) 文献紹介 R. Stanford: Conceptual Frameworks of Contemporary Psi Research 金沢氏、2) 文献紹介 J. Eccles: Human Person in Its Two-Way Relationship To The Brain 大谷氏、3) 第11回大会最終打合せ、加行はれぬ。

**超心理学講演会** 去り6月30日午後、千葉大学教養部において、同部主催の超心理学に関する講演会が行はれ、大谷氏から「超能力の科学」と題し講演を行った。参加者は、同学教養部学生及び教員約150名、講演終了後、活発な質疑応答が行はれた。

## 地震のお見舞い

去り6月12日宮城県沖地震では、仙台を中心に大きな被害をこうむりました。幸い仙台地区の会員各位の家族の方々には大変な被害がなかったと一喜です。しかし、不自由な生活を長く強いと大被害をこうむる方が多かつたことを存じます。お見舞い申し上げます。

## 次回月例研究会

月例研究会は8月は休会、9月に第126回研究会を開催予定とあります。追ってご連絡致します。

NEWSLETTER 1978年7月25日発行 ©  
編集・発行: 日本超心理学会

THE HUMAN PERSON IN ITS TWO-WAY RELATIONSHIP TO THE BRAIN

By Sir John Eccles

紹介者 大谷宗司

私は以前から運心理学に関心をもちました。私は運心理学者の皆さん加余りに extraordinary な現象の記述にかかわり、これら現象の持つ意味について十分に考察をせしめるように思はれど苦言を呈した。運心理的現象は、脳と心に深く関係していると思はれど、ここで、私の主張である二元論哲学についてお話ししようと思ふ。

哲学者 Popper は the world of Physical states, the world of state of consciousness, the world of culture and civilization が存在するとす。我々が何かを感覚的に経験すると脳に活動が起り、それが心に受取られる。これが才の奇界であり、それは意識的自己が成立する。意識的自己は物理的な奇界にあり、脳の中に存在するのではなく、才の奇界であり、心の中に存在する。記憶、感情、思考、想像、夢これらすべては心の中のできごとである。

我々が風景を見る時、それは網膜に映っているが、脳にはその相反絵は存在しない。あの興奮は発火している細胞の群である。映像は脳にはなく心の中にあるのである。脳は暗号化された情報を運ぶだけで絵を運ぶのではない、絵は脳を走査する心によって作られるのである。

色彩についても同じである。外界には色は存在しない。物理的には色は波長の電磁波があるだけである。波長の違いによって興奮する細胞のイオンが変り、心がこれを走査して色を作るのである。

大脳両半球を連結している corpus callosum を切断した Sperry の実験は有名である。通常言語領域は左半球にあり、両半球の結合を断ると、被験者は右半球に行はれ、その事柄が分からなくなってしまう。彼はも早意識的経験は左半球からしか受取りることができない。彼は左手でコントロールする事は出来ない。彼の自己意識は左半球に限定され、右半球は意識的経験や行動を行なう働きを失ってしまうのである。これは、心が全く働かないこと、そこから経験を受取ることの出来ない脳があるという事にはなる。

私は、脳を活動させるための引金として役割をたすのは psychokinesis であると考え。あなたの手が指を動かそうと意志する。指の運動が始まる0.8秒前、脳の電位はマイナスになる。これを readiness potential という。これは脳の表面に広く分布している神経細胞が発火したためである。数百万のニューロンがイオンを形成して、発火する。それが徐々に集中し、特定の指を動かす motor cortex の finger area につたがり、その興奮が指の運動を促すのである。この様な操作は学習によって行はれるようになる。我々は生来この数週間このことを学んでいくのである。生命は脳という素晴らしい道具を使うことを学んでいくのである。

大脳皮質のニューロンは、横断面0.2mm<sup>2</sup>長さ3mmの垂直の柱のように配列しており、これが基本単位をなしている。この柱の上には二つの薄層があり微細な結合の領域をなしている。私が思うには、ここが脳に働きかける所である。我々の脳には数百万のこの基本単位があり、それぞれには一万の細胞が含まれている。ここに活動が起る二種類の経験が現れるのである。経験は脳にあるのではなく心の中にある。心は独立の存在で、且脳より上位の存在である。

睡眠に入ると、心はこの基本単位を走査して何を得るにこの仕事はなくなる。二人睡眠状態、麻酔状態でも同じである。心はあり自己であるが、脳を操作する道が断たれているのである。我々により脳が存続したかどうかが分らない。しかし、我々は唯物一元論の眼差しからいって注意を向けなければならない。

我々は意識的存在である。この素晴らしい美しい経験、これは創造されたものであるから分らない。運心理学においては、脳の役割についてよりも、心の役割は何であるかを究明し、究明する必要があるであろう。

Sir John Eccles : Prof. of Physiology, the Australian National University, Canberra, 著名な神経生理学者。

本論文は、1964年 P.A. 年次大会 (the State Univ. of Utrecht, the Netherlands) での特別講演である。